

## 授業題目「インシデント・プロセス法によるカウンセリング研修」

教育実践総合センター 夏野良司

### はじめに

心理臨床の実際において個別のケースの援助力量は無論重要であるが、子ども集団、保護者の会、研修の講師役割等、グループ単位での臨床活動とそれを扱える臨床家の力量へのニーズが高まっている。本授業科目全体のねらいは、仲間や学級集団をユニットとする心理的援助活動のいくつかを取り上げ、演習実習によって、集団を扱う力量研鑽を図ることにある。授業内容は、理論学習と実技演習の組み合わせを進めている。今年度は、①構成エンカウンター・グループ、②ピア・サポート、③ソーシャル・スキル教育、④ストレス・マネジメント、⑤インシデントプロセス法である。

このたびの公開授業は、インシデントプロセス法を用いたカウンセリング研修について、取り上げる。

### 【授業実践】

#### <参加者>

受講生は、臨床心理学コースM1、11名（男2、女9）である。実習では2グループに分かれて作業を進める。授業参観者は教育学部教員3名である。

#### <場所>

教育実践総合センター二階講義室

#### <準備物>

レジュメ印刷資料1部、事例提示資料1枚、事例経過図解資料1枚、2グループ分の模造紙1枚ずつ、マジック、サインペン。付箋紙。

### <授業のねらい>

インシデント法による授業は、受講者が、自分の考えを明確にし、客観化し、相互に討議し、情報を共有し、相違点を明かし、異なる意見を統合していくプロセスであり、そのプロセスの体験によって、心理臨床家の素地である、理解と受容と誠実さという資質に触れる機会の提供をねらいとする。

（導入）校内研修と事例検討の課題

（理論説明）インシデントプロセス法

- 1) 事例研究法の種類
- 2) インシデントプロセス法
- 3) 研修の進め方

### <実習>

#### ●事例提示と黙読（10分）

授業者（筆者）が事例報告者役割を取り、事例を報告。（配布資料：中学生不登校男子事例）

#### ●情報収集（15分）

進行者が受講生全員に指名して、受講生全員が質問できるようにする。その際、一度出た質問は二度できないことと、一回の質問について一つの内容しか聞けないことを共通理解させる。

#### ●個人研究（10分）

自由な発想のもとで問題点とその解決策を考える。対処すべき問題を3項目あげ、それぞれについて要因背景、対処方法を考える。1枚の付箋紙に1項目を記入する。自分の付箋紙には氏名を記入する。

#### ●グループ研究（20分）

グループ研究の発表者、記録者を決める。

グループで各自の付箋紙を読みながら模造紙上に並べて提示する。グループメンバー全員で内容の類似している付箋紙をまとめ、グループとしての見解を構造化し、図式を完成させる。

(検討上の要点)他人の意見を批判しない、自分の意見を押しつけないこと、相互に耳を傾けること、憶測で発言せず情報収集で得た事実に基づいて議論すること、具体的に実行可能な案を創ること、グループでなぜそのような決定をしたのか、理由や根拠も発表すること、

#### ●全体研究 (10分)

各グループで作成した模造紙上に図式化された見解を全体の場合へ発表する。

#### ●事例報告者の説明 (5分)

報告者から、グループの見解(案)について、事例のその後の経過、自分の体験と意見を交えて感想を述べる。(事例の経過図解資料配付)

#### ●まとめ

### 【カンファレンス】

授業終了後、続けてカンファレンスを実施した。参加者は、教育学部教員2名であり、授業者の振り返りを含めて、以下のような意見が提出された。

・授業者の授業への関与は積極的であり、自発的に質問が多く出されていて、雰囲気もよかった。

・全員参加、全員発言のルールが効果があった。

・授業全体の進め方が資料によってはっきり示されていてよかった。

・グループ研究では、グループによって図解の作成の手順が異なっていた。グループのリーダーロールを取るメンバーの影響が大きかったようだ。グループ構成上、教職経験者など社会人メンバーをバランスよく配置すると効果的であろう。

・グループ研究は後半時間が不足気味であった。全体授業時間が数分延長となった。導入部分で、少々余談が多かったと反省。

・進行役割と事例報告者役割は別であるが、今回は、受講生をよく把握している授業者が事例報告者となることで、情報収集の段階での臨機応変に対応できて、受講生の分析に必要な情報を的確に提供できたように思われる。

おわりに

授業者が、事例報告者の体験を介して臨床家としての自己を疑似体験(シュミレート)し、臨床の知と技について検討する機会を得られたとしたら、また、グループ内の自己表現とメンバーとのリレーションづくり、自己、他者、相互の理解の形成、コワーキングの心地よさとおもしろさの体験を幾分でも得られたとしたら、可なりと考えたい。

### 【参考文献】

・角谷泰生 1995「インシデント・プロセス法による校内研修システム構築に関する研究」 兵庫教育大学大学院修士論文

・ポール・ピゴーズ、フェイス・ピゴーズ 菅祝四郎訳 1981「インシデントプロセス事例研究法」 産業能率大学出版部

・埼玉県立南教育センター(1992) 「南教育センター方式を取り入れた事例研修会の工夫・改善に関する調査研究」 埼玉県立南教育センター研究報告書第238号

最後になりましたが、ご多用の中、授業に参加し貴重なご意見ご指導を賜りました、長尾秀夫教授、深田昭三教授、信原孝司准教授に厚く御礼申し上げます